

- 結びつくことで笑顔あふれる街にしたい  
—上井草結いの会 ..... 1~3面
- コロナ禍でも情報紙で住民とコミュニケーション  
—高円寺南2丁目の支え合いを考える会 ..... 3~4面

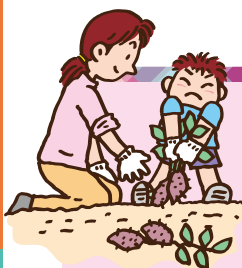
# 杉並 づる る

つなく ひろがる ささえる

## 22

2021年12月発行 vol.

「しらせよう!」  
「ご近所」  
「で」  
「ぼっこり」  
「まわりのほろ」  
「をみよい」



## 結びつくことで 笑顔あふれる街にしたい —上井草結いの会

杉並区上井草地域では令和元年11月に「上井草結いの会」(以後「結いの会」)という地域づくりの組織(第2層協議体)が立ち上がりました。同会の特色は地域の町会・自治会や児童館、学校支援本部などの公的団体だけでなく、NPO法人やスポーツセンターなど民間団体が参加していることです。それが活動を推進するエネルギーにもなっています。コロナ禍の令和3年度は、初めて目に見える活動として、多世代が交流できる農業体験と手作りの品を販売するバザーを行いました。モットーは「お互いに知り合い、助け合えるような結びつきを作り、みんなが笑顔で暮らせるまちをつくる」。来年度の活動計画の検討も始まっています。

### 発足までに1年半の準備



バザーの振り返りをする運営委員の皆さん

「結いの会」の参加・協賛団体は14団体。これを協力団体の井荻地区民生・児童委員協議会、杉並区社会福祉協議会、ケア24(地域包括支援センター)上井草がバックアップしています。これらの団体の代表者で構成する運営委員会で具体的な活動について話し合っています。

実は会の発足までに1年半がかかりました。上井草地域で生活支援のサービスを行っていた一般社団法人「困ったときのSOS」の小暮久美子代表に、ケア24上井草が「地域課題を一緒に考える場を作りませんか」と声を掛けたことから始まります。同法人が毎月開いている食事会に民生委員や保育園の園長らを招き、何回か意見交換する機会をつくりました。この集いが「結いの会」の「前身」になり、会の設立目的を決める大きな役割を果たしました。

### コンセプトを“見える化”

運営委員会の石田悦実副会長(上井草自治会副会長)は「この地域では各団体の活動は活発ですが、いずれも縦割りで横のつながりがありません。その問題意識の共有から始まりました」と話します。埴耕平会長(同)も「地域の課題解決には、お互いがよく知り合い、助け合うことが必要です。困っている人がいることが分かれば、助けようという人はいます。それをつなげられるネットワークをつくりたいのです」と訴えます。「結いの会」はそうしたコンセプトを「見える化」しようと、パンフレットを作りました。組織図や活動内容をイラスト入りで説明しているほか、14の参加・協賛団体を写真と一緒に紹介しています。作成作業を通じて運営委員の間で同じ認識を共有できているようです。



「結いの会」のパンフレット

## 子どもの参加で多世代をつなげる

では、人や団体がつながるために何をすればよいか。具体的な活動が伴わないと地域の理解を得られないのではないかと。運営委員会は模索しました。議論していく中で浮上したのが「子どもを中心にした多世代の交流」です。ケア24上井草の渡辺由女さんは「子どもも参加できることならば、父母、祖父母ら多世代の人を巻き込んでいけるはずですよ」と言います。そこで、保育園や学校支援本部、児童館の人たちに運営委員に加わってもらいました。

出てきたアイデアが「農業体験」です。「園児たちに芋掘りをさせたい」という保育園長の発言がきっかけでした。「それならば結いの会としてお手伝いできるかもしれない」と、さっそく都立農芸高校近くの畑のオーナーに交渉に出向いたり、生産緑地の畑を借りるために必要な手続きを区役所に相談したりと動き始めました。緑や生産緑地が多い井草の地域特性を生かしたつながりづくりができないか…という会の思いも背景にありました。



サツマイモを収穫する親子

## 1年かけて“予行演習”

「初めはすぐにも家族で参加するサツマイモづくりをしようと思った」という塙会長。それを阻んだのがコロナ禍でした。野外での活動とはいえ、密になるのは避けなければなりません。そこで、畑は借りられたので、まずは運営委員が1年かけて“予行演習”をすることにしました。石田副会長は「畑の草むしりから



都立農芸高校の農産加工研究部が作るスイートポテト

たい肥作りまで、大変で手間暇がかかりました」とその苦労を振り返ります。

その甲斐があったのか、“本番”（令和3年度）のサツマイモ栽培では、土づくり、畝づくりに子どもたちのお父さんが参加したり、運営委員の知り合いの農協職員が手伝ってくれたりして、順調に進みました。10月30日、31日の収穫祭には親子ら約40人が参加。自分たちが苗を植えた畝から大小さまざまなサツマイモを掘りました。参加者からは「ひと家族6株と抜きごたえがあり、みんなで楽しめました」「保存方法も教えてもらい、勉強になりました」「次回も参加できればうれしいです」などの声が聞かれ、好評でした。

「結いの会」が連携を模索している都立農芸高校には、収穫したサツマイモを使った料理教室の開催を働きかけました。残念ながら料理教室は実現しませんでした。同校の農産加工研究部が同校ホームページのYouTubeチャンネルに簡単スイートポテトの作り方（4分程の動画）<sup>\*</sup>を掲載してくれました。このように地域のさまざまな団体・組織との関係づくりに努めています。

## バザーで活動資金をねん出

令和3年度の活動第2弾は、「結いの会」の会員団体でもある上井草スポーツセンターの「スポーツフェスティバル」（10月10日）に出店したバザーです。バザーは元々、「困ったときのSOS」が特別養護老人ホーム上井草園で秋に開催していましたが、「地域のつながりをつくる機会にもなる」と運営委員会のメンバーが手伝っていました。そこへ上井草スポーツセンター側からスポーツフェスティバルでバザーを開くことを打診してきたため、「渡りに船」です。「結いの会」が協力する形で出店することにしました。

販売品は手づくりのものが多く、障がい者の作業所で作った財布などの小物や、会員団体とつながりがあるグループの手づくり作品などです。「結いの会」が力を入れたのはビーズで作ったマスクストラップ。副会長の馬場容子さん（今川町親和会副会長）は「私たちはゼロからのスタートですから、活動資金が必要です。

<sup>\*</sup>スイートポテトの作り方詳細は右QRコードから動画をご視聴ください。YouTube「スイートポテトの作り方」都立農芸高校農産加工研究部



コロナ禍でマスクは欠かせない日用品となったので、それに付けるストラップを作って販売することにしました」と話します。バザーだけでなく、運営委員が関係しているラジオ体操やコーラスの集いでも販売。ビーズで出来たストラップは女性に人気があって売り上げはまずまず。その1割を区の次世代育成基金へ寄付するほか、次の材料の仕入れや農業体験の苗、参加者のボランティア保険などに充てる予定です。

10月14日にバザーの振り返りをした運営委員会では、「コロナ禍でも開催したことは意義がある」と前向きに評価する声が大勢を占めました。来年のスポーツフェスティバルやバザーについても活発な意見交換が行われ、上井草スポーツセンターの柏木秋作さんは「来年のスポーツフェスティバルには井草中学校や都立農芸高校などにも参加してもらうとか、文化祭と同時開催にするとかして、もう少し大きなフェスティバルを目指したい」と意欲的です。「結いの会」としても「せめて上井草商店街には参加してもらおうよう呼び掛けたい」と話せば、石田副会長は「子どもたちの安全は“地



バザーで手づくりの品を販売する運営委員ら

域の目」があつてのこと。そのためには街が活性化していなければ。スポーツフェスティバルは結いの会にとってもよい刺激になっている」とエールを送っていました。

「結いの会」が来年度どのような活動を展開するのか、注目していきたいと思います。

## コロナ禍でも情報紙で 住民とコミュニケーション —高円寺南2丁目の支え合いを考える会



高円寺南2丁目の民生委員や、町会・自治会、あんしん協力員<sup>※</sup>、地域活動団体などが集まる「高円寺南2丁目の支え合いを考える会」(ケア24(地域包括支援センター)梅里担当圏域の第2層協議体、以下「支え合いを考える会」)は、コロナ禍で高齢者訪問が難しくなるなか、地域の皆さんとのコミュニケーションを取り戻そうと、地域の情報紙『高円寺南2丁目ニュース』(以下、『ニュース』)の発行に取り組み始めました。

### つながるためのツールを作る

「支え合いを考える会」は平成31年3月に結成されて以来、2か月に一度メンバーが集まって地域資源や地域課題について情報交換をしてきましたが、翌年には新型コロナウイルス感染症の拡大で、集まりを休止せざるを得なくなりました。さらに、地域の中心にあった杉並第八小学校(以下、杉八小)が令和2年3月で廃校になりました。杉八小では運動会やお祭りなどのイベントが行われ、地域の人たちの集まる大事な場所でした。その拠点がなくなり、「住民同士のコミュニケーションが減ってしまった」とメンバーは危機感を募らせた。

そこで、第2波収束後の同年10月以降に再開した集まりで、「会えないなかでもつながりのきっかけを作る」ことを目指して、地域情報紙の発行を決めます。メンバーの一人で高円寺中央地区民生委員の鮎澤千景さんは「毎年1回は訪問する『地域のたすけあいネットワー



発行した  
「高円寺南2丁目ニュース」  
1号(左)、2号

<sup>※</sup>あんしん協力員とは、見守りや声かけで高齢者をサポートする「たすけあいネットワーク(地域の目)」事業に協力いただいているボランティアです。

ク』登録者とも電話でしか話せなくなってしまいました。なにか、交流するためのツールが欲しかったです」と振り返ります。

## 一時避難場所の変更を周知



支え合いを考える会の集会

具体的な目標が定まり、「支え合いを考える会」はアクセルを踏みます。第3波の到来、2回目の緊急事態宣言という逆風になりましたが、メンバーが広い部屋を見つけるなど感染対策をしつつ、会合や情報紙の制作を進めました。メンバーの意見やアイデアをまとめ、レイアウトに落とし込むのはケア24梅里の浜田愛さんです。最後に残った課題、制作費の捻出は、メンバーの一人、石川千明さんが運営する高円寺子ども食堂からの寄付で解決。令和3年3月、記念すべき『ニュース』1号が発行されました。

発行部数は400部。民生委員らが高齢者に手渡したり、メモを添えてポストिंगしたところ、受け取った人たちから電話があるなど手応えを感じたそうです。この1号で最も伝えたかったニュースは、廃校後も一時避難場所として使われていた旧杉八小が3月に閉鎖され、それに伴い一時避難場所が変更されることでした。そこで、郵便局やスーパーマーケットなど、高齢者の立ち寄りそうなところにも掲示を依頼。「変更は区報等でも告知されていましたが、『知らなかった!』という声をよく聞きました。『ニュース』が役に立ちました」と鮎澤さん。

## 活動から生まれる地域のつながり

個々に地域活動をする人たちが、「支え合いを考える会」で集まることで、横のつながりも生まれています。高円寺中央地区民生委員の村井喜美さんは、印刷業務等の補助をしている高校で、ボランティアをしたいと学校職員の方たちから相談を受け、ケア24や杉並区社会福祉協議会に相談し、いくつかの子ども食堂につな

ぎました。「子ども食堂では20人ほどまとまった手伝いの方を求めているので、とても助かります」と石川さん。「この会に参加して知ったのは、担い手を求めている団体・グループが地域のあちこちにあることです。ボランティアをするほうも、活躍の場がもたらえて嬉しいんです。私自身、自分と一緒に活動してくれる人がいるという幸せを感じています」と村井さんは笑みを浮かべます。

継続して『ニュース』を発行したいという思いから寄付が集まり、今年11月発行の『ニュース』2号では、800部を印刷。今回は町会内の班で回す回覧板にも入れていくことができるそうです。「この地域には単身者の住むアパートが多いのですが、町会に加入していない方には回覧板が回りません。同じ地域に住んでいるのですから、そうした皆さんにもお知らせしたい」と鮎澤さんは言います。こうした住人の中には、地域に関心はあるものの接点や糸口がないため、町会に加入していない人もいるかもしれません。『ニュース』はそうした人とのつながりをつくり、町会や地域活動につなげるツールとしても期待できそうです。

2号の主な話題は、食品や料理を電話などで注文して配達してもらえる地域のお店の情報。お店を調べた村井さんは「『ニュース』を地域の人に役立つものにしたんです」と意気込みます。また、「ミニコラム」を担当した鮎澤さんは、「例えば、この界隈にあるあの会社は何をしているのかしら。若い人がたくさん働いているなら、震災の時に協力してもらえないだろうか？ ニュースの配布や情報収集のときにちょっと声をかけてみようかな、などと、やってみたいことはいろいろあります」と楽しそう。

高円寺南2丁目は、JR中央線高円寺駅と東京メトロ丸ノ内線新高円寺駅の間に位置し、交通の便に恵まれているため、住民の生活圏は広範になります。住民自らが作る地域情報紙は、“地元”の再発見とつながり、支えあうきっかけになるかもしれません。



右から、鮎澤千景さん、村井喜美さん、石川千明さん、ケア24梅里の浜田愛さん

